様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19720196
研究課題名（和文）　15 世紀の聖地巡礼記に見る十字軍観・イスラーム観―記憶と経験―

研究課題名（英文）　The Pilgrims' View on Crusades, Islam and Muslims in the 15th Century: Memory and Experience

研究代表者
櫻井　康人（YASUTO SAKURAI）
東北学院大学・文学部歴史学科・准教授
研究者番号：60382652

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：西洋史・中世史・十字軍・聖地巡礼・イスラーム

１．研究計画の概要
本研究では、15 世紀に作成された聖地巡礼記を網羅的に分析し、そこから十字軍観・イスラーム観に関する情報を抽出し、その情報を聖地巡礼記全体の文脈で問い直すことによって、ヨーロッパ世界ではいかなる十字軍観・イスラーム観が見られたのか、およびその変遷を見ることを主たる目的としている。この目的を果たすために、約 250 を数える 15 世紀の聖地巡礼記を三つの時期で区分し、始めの 3 年間において順に史料の分析を行い、最終年度においては 3 年間の分析の結果についての考察を行う。

２．研究の進捗状況
史料の分析は、当初の予定通り 3 年目までに完了している。４年目となる本年度においては、現在これまでの史料を分析の結果を踏まえて考察を行い、全体像の把握に努めている最中である。

３．現在までの達成度
当初の計画以上に進展している。本研究が目的とする範囲においては計画通りの達成度であると言えるが、考察を進める中で生じた本研究の範囲外の考察（4～14 世紀の聖地巡礼記との比較）もすでに完了していることから、現在までの達成度は当初の計画以上に進展していると言える。

４．今後の研究の推進方策
基本的には、当初の計画通りに研究を推進していく。その中で余力があれば、現在までの考察の中で生じた新たな問題関心（聖墳墓の騎士に関する考察）についても考察を行い、本研究を異なる側面から照射したいと考えている。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①櫻井康人、4～13 世紀の聖地巡礼記に見るイスラーム・ムスリム観の変遷、『ヨーロッパ文化史研究』9 号、47～88 頁、2008 年、査読有
②櫻井康人、15 世紀前半の聖地巡礼記に見る十字軍・イスラーム・ムスリム観―後期十字軍再考(3)―、『ヨーロッパ文化史研究』10 号、53～100 頁、2009 年、査読有
③櫻井康人、12 世紀イェルサレム王国における農村世界の変容―「ナブルス逃亡事件」の背景―、『ヨーロッパ文化史研究』11 号、181～215 頁、2010 年、査読有
④櫻井康人、騎士修道会と curia regis―前期エルサレム王国構造に関する一考察―、『東北学院大学論集　歴史と文化（旧歴史学・地理学)』45 号、75～89 頁、2010 年、査読無
⑤櫻井康人、「帝国」としての「キリスト教国」―普遍教会会議決議録における平和と十

字軍の言説―、『東北学院大学論集　歴史と文化（旧歴史学・地理学）』46 号、55～88 頁、2010 年、査読無

〔学会発表〕（計１件）
①櫻井康人、フランク人支配下のムスリム―『聖地のシャイフたちの奇跡的な行い』を中心に―、第 77 回西洋史読書会大会、京都大学（京都府）、2009 年 11 月 3 日

〔図書〕（計１件）
①櫻井康人（共著）、第 4 章　マルティン・フォン・パイリスの「十字軍」―「十字軍」参加者の「十字軍」観、前川和也編著『空間と移動の社会史』ミネルヴァ書房、2009 年、91～114 頁